

# 音楽のできる子できない子 子についての研究

(第一報)

長野県立保育専門学院

小松 卓郎

榛葉 和子

音楽とは何か、音楽の「できる」、「できない」を区分する評価は、どのようにすれば妥当であるか——このような複雑多岐に渉る問題を追求することは本研究の目標ではない。がしかし、我々の好むと好まざるとにかかわらず、我々の周囲には、現実の問題として「あの子は音楽ができる」とか「この子はできない」とか、評価づけられている子ども達にみたまはれている。

近時、学校や保育園における身体検査が漸次綿密に行なわれるようになってから、我々はしばしば、いわゆる音楽のできない子の中に、身体障害のある子ども達を見出すようになった。もとより、これが直ちに音楽的才能を左右するものとは思われない。けれども音楽が生体を離れたものでない場合、殊に身心相関の立場からその生体をみた場合、種々の疾病、なかんずく耳鼻咽喉科方面の慢性疾患を持つ子ども達も、音楽教育の際に、何らかの形においてそれなりの負担を背負っていることは容易に想像できることであり、単に周囲の不注意とすればそれまでであるが、現実としては、その不注意が、不注意として気づかれていなかったところに問題があるものと思われる。このような問題から、我々はいわゆる音楽のできない子

第1表 家庭の音楽に対する関心の状態

A/B	上中下			計
	上	中	下	
A	23 (37.9)	32 (52.5)	6 (9.6)	61
B	8 (14.0)	35 (61.4)	14 (24.6)	57
計	31 (26.3)	67 (56.9)	30 (16.8)	118

第2表 主な設備の比較

種類	グループ			計
	A	B		
ピアノ	6 (9.8)	2 (3.5)	8 (6.8)	
オルガン	25 (41.0)	6 (10.5)	31 (26.3)	
バイオリン	6 (9.8)	3 (5.3)	9 (7.6)	
ラジオ	61 (100)	52 (91.2)	113 (95.8)	
テレビ	36 (59.0)	22 (38.6)	58 (49.2)	
電 蓄	33 (51.4)	17 (29.8)	50 (42.4)	
レコード	36 (59.0)	22 (38.6)	58 (49.2)	
計	204	124	327	

の健康状態、生理機能等を調査し、いわゆるできる子との比較研究を試みたのである。したがって従来より多くの専門家達によって研究されている音楽的才能の素質や環境の問題、または教育や指導、またはこれに伴う評価の問題などは、その性質、方向を異にするものであるが、広義の保育園または学校衛生の領域に新たに包含されると共に、音楽を取り扱う分野から、改めて広く採り上げられなければならない領域の問題と思われる。我々は本研究の第一着手として、市内某小学校生徒について、各クラス担任、音楽教師による評価を基準とし、各クラスより「出来る子」「出来ない子」をそれぞれ一〇名ずつ選定し、これらの子ども達の健康、学習状態を観察し、併せて参考的に、環境的条件としての事項を各家庭について調査し、本研究としての予備的段階のものを、第一報として報告した。すなわち、いわゆる出来る子ⅡAグループ六一名、出来ない子ⅡBグループ五七名、計一一八名の学童についての報告であり、園

第3表 楽器所有者数の比較 (学校教材以外のもの)

性別	A			B			合計
	有	無	計	有	無	計	
♂	11 (19.5)	9 (16.1)	20 (35.6)	11 (19.6)	25 (44.7)	36 (64.4)	56
♀	29 (46.8)	12 (19.4)	41 (66.2)	9 (14.5)	12 (19.3)	21 (33.8)	62
計	40 (33.9)	21 (17.7)		20 (16.9)	37 (31.5)		118

第4表 グループの学業成績の差

グループ	A	B	計
上中下			
上	27 (44.3)	10 (17.5)	37
中	30 (49.2)	23 (40.4)	53
下	4 (6.5)	24 (42.1)	28
計	61	57	118

第5表 身体検査よりみた疾病異常の比較

病名	分類	
	A (61)	B (57)
扁桃肥大	10 (16.4)	14 (24.6)
鼻炎	2 (3.3)	8 (14.0)
赤緑色盲		1 (2.0)
耳垢栓塞		1 (2.0)
難聴		2 (4.0)
頸部淋巴腺腫脹		1 (2.0)
計	11 (18.1)	27 (47.4)

以上、本研究は、未だ予備的研究の範囲のものであるが、たとえば少数の事例にもせよそれが犠牲者となる場合には看過し得ない問題点を含むものであり、その領域の各関係者に新たな関心と呼ぶべき課題を提示したものである。

児二二六名については次回にまわした。(1)家庭の音楽に対する関心の状態がどのように分布しているか、一二項の調査項目より判定し、上中下の三段階に分類してみると、やはり、上に「A」、下に「B」が多い傾向が観察される。(第1表) また、特別教育をうけさせている家庭に「A」、うけさせていない家庭に「B」が集積してみられ、(2)主な設備の比較(第2表)では、いずれも「A」に多い傾向がみえ、オルガン、電蓄、レコードなどに差がみえる。(3)学校教材以外の楽器所有者数の比較(第3表)でも各学年ごとに、「A」に多く、「A」では女子の有、「B」では男子の無に差がみえる。和洋音楽愛好についてみると両者を同じ音楽愛好の家庭が多い(八・二%)が「A」、「B」間の差

異は認められない。更に、ラジオ、テレビなどで特に音楽を選んで大きく家庭と、選ばない家庭などの比較、好きな作曲家のある家庭とない家庭、家族の好きな歌の種類や好きな歌手の有無の家庭の比較、父母の音楽に対する態度(無関心、普通、積極的)からみた比較などでは「A」「B」間に特別な差異は認め難いが、レコードを撰んで聞かせる家庭の場合は、「A」に多い傾向であった。(4)学業成績からみた「A」「B」の比較(第4表)では、「A」に「上」が多く、「B」に「下」が多い成績である。各学科の成績ごとにみた場合、国語、算数、理科、社会などの順位で、「A」に優れた者が多く、「B」に劣った者が多い成績であった。(5)身体検査からみた比較(第5表)では、「B」の子ども達に、特に指摘された疾病異常が多い成績である。このうち、耳垢栓塞、難聴は特に程度の高いものであり、後者は新たに施行されたオーディオメーターによる聴覚検査によって指摘されたものである。身長、体重、胸囲、比胸、坐高などを通してみた身体の発育状況では、特別の差異が認められていない段階である。